

世界文学全集 II-23

ム シ ル

特性のない男

三人の女

加 藤 二 郎 柳川成男 訳
北野富志雄 川村二郎

河 出 書 房

世界文学全集 II-23 ム シ ル



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和39年5月9日 初版発行
昭和44年9月20日 3版発行

定価 430円

訳者代表 加藤二郎
発行者 中島隆之
印刷者 佐藤 勇
装 幀 原 弘

印刷・有限会社 亘明舎印刷所
製 本・有限会社 黒田製本所

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

特性のない男 一

第一卷 三

第一部 一種の序文 六

第二部 同じようなことが起る 八五

三人の女 三八三

グリージャ 三八五

ポルトガルの女 四〇七

トンカ 四二八

年 譜 (加藤二郎) 四七一

解 説 (手塚富雄他) 四八一

特性のない男

加藤 柳 北
藤 川 野
二 成 富
郎 男 志
訳 雄

第一卷

主要人物

第一卷

ウルリッヒ 三十二歳、この作品の主人公。意識的夢想家。軍人、技師、数学者をへて現在無職。平行運動にまきこまれ名誉秘書にされる。

モースブルガー 情痴殺人者。ウルリッヒのひよんな努力により、精神病者が殺人犯かの問題で再審されることとなり、第二巻で精神病院に移される。第一巻の影の主人公。

ワルター ウルリッヒの幼な友たち。多面的芸術家、今は役人。「現代のごとき時代には、純粋な才能は創作から遠ざかるべし」と主張しながらも、ピアノでワグナーばかりたたく男。妻のクラリッセに子供をせびる。

クラリッセ 二十五歳、ワルターの妻。今は夫に失望し、みづから英雄的たらんと願い、モースブルガー救出を策し、ウルリッヒを誘いこもうとし、彼の子供を生みたがる。狂気一歩手前のニーチェ狂信女。

ボーナデア 三十歳前後。裁判官の夫をもち二児の母。ウルリッヒを手放すまいとする慕男狂マダム。

ラインスドルフ 国粹主義者の老伯爵。市民精神を利用して、平行運動を国粹運動にせんとあやつる中心人物。ウルリッヒを秘書にする。

ディオテイーマ 三十歳前後、ウルリッヒの従妹。理想主義者。だが第二巻で、セックスの本を研究しだす。彼女のサロンは平行運動の中心地。

トウチイ デイオテイーマの夫。外務省兼宮内省の省内きつての実力者。十九世紀的合理主義的外交官。プロシヤ人アルンハイムを疑る。

アルンハイム 四十歳半ばの独身者。プロシヤ・ドイツの鉄鋼王の御曹子。しかも大博識で著述もする。時代に敏感なもの、彼こそこの世では普通通反している両極を結合するものだ、と騒ぐ。彼の「理念と権力の結合」、「魂と経済の結合」には、ウルリッヒと立腹。ディオテイーマとプラトニック・ラブにおちいるも、第二巻で破れる。オーストリアのガルシア地方の油田を、こっそり手に入れんと策する。

ラヘル ガルシア出身のユダヤ娘。ディオテイーマの小間使い。彼女に心服するが、第二巻で憎むようになる。

ゾリマン 十六七歳、アルンハイムの黒人下僕。ラヘルを恋する。主人アルンハイムを憎み、その秘密を探らんとする。

レオ・フィシエル ウルリッヒの年上の友。ユダヤ人で、自由主義者の初老の男。ロイド銀行の業務代理人。

ゲルダ 二十三歳、フィシエルの一人娘。以前ウルリッヒとある仲になったが、互いに結婚の意志なし。ユダヤ人の父に反抗し、キリスト教的・ゲルマン的神秘主義に傾く。

ハンス・ゼツプ ゲルダの友人で、彼女と同年齢。ユダヤ思想を反撃し、キリスト教的・ゲルマン的神秘主義に陶醉する若者。

シュトゥム ウルリッヒの昔の上官。今は陸軍省文化教育課長。少将。省の命令で平行運動にとりいらんとし、これを魂の救済運動にしようと志すディオティーマに憎悪される。

父 ウルリッヒの老父。ペダンチックな古典派法律学者。モースブルガーの件に関する刑法改正に努力。

シュブング ウルリッヒの父の学友、社会学派法律学者。右の刑法改正でもウルリッヒの父と対立、絶交状態となる。

第二卷

アガーテ 第二卷の中心人物。二十七歳、ウルリッヒの「忘

れられた妹」兄ウルリッヒとともに、無所有の愛の王国「千年王国」に入らんとする。

ハーガウワー アガーテの夫。将来多望なる教育家。

リントナー やもめの教育家。ハーガウワーと教育的立場で対立。

マインガスト 「権力」中心の哲学者。ワルターの家に逗留し、クラリッセの英雄思想を鼓舞することとなる。

ドラングザール デイオティーマのサロンの人気を、自分のサロンにさらおうとする夫人。

フオイエルマワー ドラングザール夫人のお気に入り、の詩人。平和主義に燃える若者。ディオティーマのサロンに乗りこむ。

フリーデンタール モースブルガーを収容している精神病院の医師。

ジークムント クラリッモの兄、医師。

第一部 一種の序文

1 注目に価することではあるが、なにごと とも起らぬ第一章

大西洋上に低気圧があつた。低気圧は東方に移動して、ロシア上空に停滞する高気圧に向つていたが、これを北方に避ける傾向はまだ示していなかった。等温線と等暑線はその責務を果たしていた。気温は、年間平均気温とも、最寒の月と最暖の月の気温とも、また非周期的な月の気温の変化とも、正常な関係をたもっていた。日の出と日の入り、月の出と月の入り、月、金星および土星のみちかけ、ならびに他の重要な現象も、天文学年表にあらわれた予測と合致していた。大気中の蒸気は最高の乾燥度を示し、湿り気は少なかった。以上の事柄をかなりよく一言で要約すれば、いくらか古風な言いまわしになるうが——それは、一九一三年八月のある晴れた日のことであつたのである。

自動車は、狭くて深いいくつもの道路を抜け出して、明るい浅瀬のような広場に向つて殺到していた。黒い歩

行者の群は、空をゆく雲の形をしていた。この散漫な雲の流れを、より強靱な速度の縞帯が横切るところでは、それは一時凝集し、やがて急速にさらさら流れだし、そしてちよつとさざなみだつた後で、ふたたびもとの規則正しいリズムを取り戻した。千百の音響がからみあって、針金をよじりあわせたような騒音の太い線となり、その太線の中から数本尖つた切っ先が飛びだしたり、その線にそつて切れ味のよい切り口が走りだしてまた引つこんだり、あるいは明るい響きがその太線の中から弾けで、飛び去つていったりしていた。

このような騒音を聞けば、その特色が述べられなくても、またここに何年も不在であつた人が目を閉じてでも、自分が首都にして帝都であるウィーン市にいることが分つたことだろう。都会というものは、人間と同様、その歩きぶりで分るものである。もしここで閉じた目をあければ、個々の特色からウィーンだと分るよりはるか以前に、街の動きようですぐにそれと分つたことだろう。想像でそうできると思つただけでもかまひはしない。自分の在所を過大視する習慣は、餌場をおぼえておらねばならなかつた遊牧民の時代に発する。赤い鼻をまつた不正確に、ただその鼻は赤いというだけで満足してしまい、波長によればミクロミリメートルまで正確にあらわせるはずなのに、その鼻がどんなに特殊な赤味を

帯びているかについて、ことさらに疑問をいだかぬ訳を知るのは、重要なことと思われる。ところが人は、自分が今いる都会のように非常に複雑なものに対しては、それがどんなに特殊な都会であるかを、いつもひどく正確に知りたがるものだ。これが、より重要な事柄から注意をそらすことになるのである。

だから、この都会の名前に特に重きをおいてはならぬ。この都会もあらゆる大都会と同様に、不規則、交代、急変、断続、物と物との衝突や事件と事件の衝突、そしてその間に介在する底なしの静寂の地点、舗装道路と舗装のしていない道路、リズムミカルな大打撃音、対立するさまざまなリズムの永遠の混乱と不協和、などなどから成り立っていた。そしてこの都市も全体的には、家、法律、法令、伝統などという永持ちのする材料でできた器の中で煮えたっている泡、に似ていた。

この都市の廣くてにぎやかな通りの一つをやってくる二人の人は、もちろんこんな印象をまるでいだいていなかった。彼らは明らかに特権階級の一員で、その服装や物腰や、会話のやりとりにも品があり、そして彼らの名前の頭文字を意味ありげに下着に縫いつけていた。そして同様に——というのは、外へは向けられずに、彼らの意識の繊細な肌膚せんさいの中でという意味で——彼らは自分が誰であるかを知っており、首都にして帝都たるこの都

で、自分らが所を得ていることをも自覚していた。彼らの名前をアルンハイムとエルメリンダ・トゥチだと仮定すれば、それは当を得ていない。なぜなら、トゥチ夫人は夫と同伴で八月にはバート・アウスゼーに行っていたし、アルンハイム博士もコンスタンチノーブルに行っていたからであり、それゆえ彼ら二人が何者であるかは謎であった。想像力の旺盛なものは、きわめてしばしばこうした謎に通りでぶつかるものである。だがこの謎は、この二人のものに昔どこで会ったのかを、もし次の五十歩の間に思い出せないと、忘れるということで解かれるということは、注目に価することだ。

二人はいま突然歩みを止めた。前方の人だかりに気づいたからである。その一瞬まえに何かが順序を狂わしたのだ。横合いから打ちこむ動きがあった。何かが向きをかえて横滑りをした。いま分ったところでは、それは急ブレーキをかけた大型トラックで、舗道の縁石に車を一つかけて、のしあがっていた。蜂房のまわりにむらがる蜜蜂のように、一瞬にして人々がそのまん中をあげたまま、小さな場所のまわりにとりついた。車から下りた運転手が包装紙みたいに蒼白になってその中に立ち、大げさな身振りで事件の説明をしていた。近づいてきた者の目は、まず運転手の方に向けられ、それから慎重に穴の深みの方に沈んでいった。そこには、歩道の縁に、死んだよ

うになった男が寝かされていた。皆の見たところでは、この男は自分の不注意のために被害をこうむったものらしい。人々はこの男に何かしてやるために、代わるがわるその側にかがみこんだ。上着を開いてふたたびそれをしめたり、起そうとするかと思えば、反対にまた寝かそうとしたりしていた。要するに、人命救助会がやってきて、専門的で適切な救助をしてくれるまで、時間ふさぎをすること以外に、彼らは何もしようとしなかったのである。

例の婦人もその同伴者も近づいて、そして皆の頭越しやかがんだ背中越しに、倒れている中の男を観察した。それからあとずさり、そしてためらっていた。婦人は心臓と鳩尾あたりに不快なものを感じたのであるが、彼女はそれを当然同情心だと心得ていた。それは決断のつかぬ、すくませるような感情であった。紳士の方は、しばらく黙っていた後で、彼女に向かってこう言った。

「当地で使われているこうした大型トラックはですね、制動距離が長すぎるのです」

婦人は、この言葉で気が軽くなったように感じて、如才のない眼差しを送って紳士に感謝の意を表した。彼女は、これまでに何度かこの言葉を聞いたことがあったのであるが、制動距離とは何なのかは知らず、そしてそれを知りたいとも思っていなかった。ただこの言葉で、このおそろしい事件がなんとか片づけられて、彼女には直

接もはやなんの関係もない工学の問題に移されたので、満足したのである。それに救急車の警笛がけたたましく鳴るのも聞えていた。車の到着の敏速さが、待つ者たちの心を満足感でみたした。驚嘆すべきは、このような社会制度である。被害者を担架にのせて、担架ごと車に押しこんだ。一種の制服を着た男たちが、被害者の世話を見、そしてちらりと見たところでは、車の内部は病室のように清潔で、整頓されていた。人々は、法律と秩序の枠内で事件が起きたというもつともらしい印象をいだいて、立ち去っていった。

「アメリカの統計によりますとね」と、紳士が言った。

「あちらでは、自動車で年に十九万人が死に、四十五万が負傷しているそうです」

「あの人、死んだとお思い？」

彼の同伴の女性はそうたずね、何か尋常でないものを経験してしまったという釈然とせぬ感情を、あいかわらずいっていた。

「生きていますと思えますね」と、紳士は答えた。「車にかつぎこまれた時、まるでそんな様子でしたよ」

2 特性のない男の家とその住まい

この小さな事故が起った街路は、この都市の中心から放射状に源を發して、外郭地域を貫通して郊外へと流れる、あの河のように曲りくねって長くつづく交通路の一つであつた。さて、この通りを、かの優雅な二人連れが今しばらく進んだとしたら、きっと二人の氣に入るようなものを、彼らは目にしたにちがいない。それというのは、十八世紀あるいはさらにさかのぼって十七世紀にできて、今でも一部は昔のままに保存されている庭があり、そしてそれを取りまく細い鉄格子にそって歩くと、木々の間、手入れのゆきとどいた芝生の上に、短い翼傍屋のある小さな城めいたものが、往時は狩獵用か恋愛用に使われた別荘らしいものが、垣間見られたからである。正確に言えば、迫持ちは十七世紀にできたものであり、庭と上階とは十八世紀の外観をそなえており、前面は十九世紀に改造されていささか損われていた。それゆえ全体は二重写しの写真のようで、どこかぼやけた感じがあつたが、それでもそれには人を必ず立ちどまらせて、「ああ」と嘆声をもらさせるものがあつたのである。そしてこの白くやさしく美しい城が、その窓をあけると、四方書棚の学者住まいに特有の、あの高雅な静けさが垣間見られた。

この住まいとこの家こそ、特性のない男のものであつた。

彼は今その窓の一つの背後に立つて、若草色のフィルターをかけたような庭の空氣を通して、褐色がかった街路を見、そしてその目まぐるしさで網膜を一杯にしながら、十分前から時計を手にして、自動車や馬車、市街電車や遠くぼやけて見える通行人の顔の数などを数えていた。彼は、これらのはげしく行きすぎる群の速度、角度、活氣にみちたその力を、計量していたのである。そのため彼の目は、すばやく引きつけられてはまた引き放され、彼の注意力は、間尺もさしはさめぬほどの短時間の間に、それに抵抗しそれから引き放され、そして次のものに飛び移り、そのあとを追うように強いられていた。要するに、彼はしばらくの間このようにして頭の中で計算をしていたのであるが、やがて笑いながら時計をポケットにしまいこみ、馬鹿げたことをしたものだ、と断を下したのであつた。彼は、もしこの注意力を刻々と跳び移らせねばならぬ時に使うエネルギーを計算できるとしたら——つまり、街路の流れの中で、すくくと立っているために、人がせねばならぬ眼筋運動や心の振子運動を計量できるとしたら——アトラスが地球を支えあげるために使う力も、これにくらべたら小さなものになることが分るであらうし、現代では何もしておらぬ人間でも、巨大な仕事をやってのけているのだということが、これから測定できようと考えて、遊び半分にこの不可能

事を計算してみようと思ったのであった。

なぜなら、特性のない男は、目下のところ何もしていない人間なのだから。

では、何かをしている人間は？

「それからは二つの推論がひきだされる」と、彼はひとりごちた。

一日中静かに自分の仕事にうちこんでいる一市民の筋肉運動は、日に一度巨大な重量をもちあげる一運動選手のそれよりもはるかに大きなものである。これは生理学的にも裏づけられている。それゆえ些細な日常の行為でも、その社会的総計では、この総計に対するその適性により、英雄らの行為よりもはるかに多量のエネルギーをこの世に傾けていることになる。英雄的行為などというものは、大それた錯覚のおかげで山頂におかれる砂粒みたいなちっぽけなものに思われてくる。この考えは、彼の氣に入った。

だがここで付言しておかねばならぬことは、この考えが氣に入ったのは、彼が市民生活を愛好していたためではないということだ。理由は正反対で、むしろかしいことを身に引き受けること——このことを、彼が、以前は別であった彼の性向が、好んだからにはかならぬ。

俗物なら、あるいはひどく斬新な集団的、蟻的英雄主義の発端をここに予測するかもしれぬ。これを合理化さ

れた英雄時代などと名づけて、非常に立派なものだと思うかもしれない。今日だれがそれを知り得よう。今日でもまだ解決されていないこのような緊急な重大問題は、しかし当時でも何百とあった。それは大氣中にあった。

そして足もとで燃えていた。時は動いていた。当時まだ生をうけていなかったものには信じてもらえまいが、時はすでに騎兵らくだぐらいの速度で当時動いていたのだ。今日始まったことではない。ただどこへゆくのか分らなかったのだ。また上と下との区別がつかず、前進と後退の区別が正しくつかなかったのだ。

「したいことを、すればいいのさ」特性のない男は、肩をすくめながら、ひとりごちた。「こんなにいろいろな力がつれていては、人のすることなんぞ、まるで問題にならないからな」彼は、まるで諦めを知った人のように、いやほとんど強い刺激を常に避けようとしている病人でもあるかのように、顔をそむけた。そして隣りの化粧室を通りすぎ、そこに懸っているパンチング・ボールに近づくと、通りしなにすばやくそれに烈しい一撃を加えた。それは、諦めきった気分の時とか、無気力な状態では、とても出せぬような一撃であった。

3 特性のない男も特性のある父親をもつ ということ

少し以前に外国から帰ってきた時、特性のない男がこの小さな城を借りたのは、もとをただせばただの気まぐれと普通の住まいではつまらぬという理由からにはかならなかつた。この小さな城は、昔は避暑向きにたてられた郊外の別荘であつたのだが、大都市がこの別荘を押しのけて発展したためにそれ本来の機能を失ひ、今は住み手もなく、ただ地代の高騰を待つ休閑地にすぎなくなつていた。借地料はそれだけにわずかなものではあつたが、万事を復旧して現代の諸要求に合致させるためには、多額の金がかつたのである。それがいわば冒険となり、そのあげく、やむなく彼は父親の援助に頼らざるをえなくなつたが、これは彼にはけつして気持ちのいいものではなかつた。独立自尊を愛していたからである。彼は三十二歳、そして父親は六十九歳であつた。

老紳士は驚いた。それは、別に不意打ちをかけられたためでもなく（とはいへ、彼は無分別がきらいだから、実のところはそのためでもあつたのだが）、またそのためせねばならぬ補助のためでもなかつた。なぜなら父親

は、息子が尻を落ちつけて家庭生活に入る要求をあらわしたことには、心の底では同意していたからである。だが、小さいという言葉がついているにもせよ、城としか言いあらわしようのない建物を息子が手に入れたことは、彼の感情を害し、そして災いを予感させる不遜な行為と思われ、不安になつたのである。

この父親なる人は、貴族の家の家庭教師として人生を踏みだしていた。彼はそれを学生時代に、そしてそれにつづく若い弁護士試補の時代にもつづけていたが、別に金に困つてのことではなかつた。なぜなら、彼は当時すでに裕福になつていたのである。彼はその後大学講師となりそして正教授となつたのであるが、この時、貴族の家庭教師をしたことは骨折りがいのあつたことだと感じた。なぜならば、それまでに丹念に育てあげてきたこうした交際が実を結び、故郷の封建貴族のほとんどすべての人たちの法律顧問にしたいのしあがつていたのである——もつとも今となつては、副業をする必要はまるでなかつたのであるが。それどころか、彼がこのようにして獲得した財産は、息子の早世した母親が持参したライン地方の実業家の出した持参金とさえ、比肩するほどになつていたが、その後でも、この青年時代に獲得して成年になつて確定した貴族との関係は、ゆるみはしなかつた。功なり名とげたこの学者は、本来の法律事務の仕

事から身を引いて、今はただ時おり実入りのよい鑑定仕事をするだけであつたが、それでも昔の顧客の領域に關係のあることなら細大もらさず自分で記録にとどめ、父親たちのことはもちろん、その子、その孫のことまでもぎちようめんに書き入れていた。そしてこの記録にもとづき、結婚式や誕生日、命名日ともなれば、慇懃（いんけん）と共通の思い出をやさしくおりまぜて、その受取人に慶賀の意を表わすために、一筆書かずにはすまされることはなかつたのである。するとそのつど短い返書がとどき、それにはこの愛する友にして尊敬すべき学者に対する感謝の気持ち述べられていた。

こういう次第で、彼の息子は、父親が身につけた、ほとんど無意識ではあるが確実に相手を測定し、親しさの限界というものを実に正確に測定する尊大さという、この貴族的才能を少年時代から知っていた。そしてともあれ精神貴族というものに属する者が、馬や畑や伝統などの所有者に対していなくこの屈從的な態度には、息子はいつも腹をたてていたのである。だが父親がこのことに鈍感になったのは、打算のためではなかつた。彼はまったく本能のままに、こういう仕方で偉大な経歴を残してきたのである。彼は教授となり、アカデミーとか學術の委員会、または政府の委員会の一員となつたばかりでなく、騎士や騎士団長、いな、さらに高貴な騎士団の大字

勳章佩帶者ともなつた。陛下もついに彼を世襲貴族の階級に叙勲し給ひ、すでにそれ以前から彼を貴族院の一員に任命し給うていた。このすぐれた人物は、貴族院では貴族党にしばしば対立する自由思想の市民党（ブルジョワ）にくみしていたが、注目すべきことには、彼の顧客である貴族の側では、このことで彼を悪くとするものは一人もおらず、しかもこれに驚きすら感じていなかったたのである。つまり彼らは彼のことを、向上せんと努力する市民階級の化身（化身）そのものとみなしていたのである。この老紳士は立法という専門の仕事に熱心に参与していた。そして決戦投票採決の結果、彼が市民党の側についたと分つても、反対側はいささかもこれに怨みをいだかず、むしろ彼は誘われなかつたのだという感情を、いなくのであつた。彼が政界でしたことといえば、彼の昔の職務——つまり、彼の学識は優秀で、時おりやんわりと改良してゆく市民的なものではあるが、それでも彼の個人的な服従心は信頼できるものだという印象を貴族に与えること——をただ果たしていただけなのであり、彼の息子が主張するように、彼はなんら本質的な変化もなく、このようにして貴族の家庭教師から貴族院の教師になつたのである。

彼が城に関する一件を聞き知ったとき、これは法律で規制されている限界の侵害とはならぬまでも、それだけにいつそう気をつけて敬意を払わねばならぬ限界を侵害

したものだ、と彼には思われた。それで彼は、これまで息子にしてきた非難よりはるかに烈しい非難を息子に浴びせ、これには、碌でもない結果になりそうだという予言めいた響きさえもあつた。彼の人生に対する根本感情が、傷つけられたのである。重要なことをやってのける多くの男にみられるように、この根本感情とは、利己心とは縁遠い、いわば普遍的で個人を超越した利益に対する深い愛情であつた。換言すれば、それはもうけさせてくれたものに対する誠実な敬意であり、それともうけさせてもらつたからではなくして、その相手と共存共榮するからなのであり、つまり普遍的な理由のためであつた。これは重大問題である。血統の正しい高貴な犬でも、足蹴あしげにされてもためらわず食卓の下に自分の居場所を求めようとするではないか。それは犬の卑屈さのためではなくして、その忠誠心と帰依心とに由来している。それに、冷淡な打算家も、自分に利益をもたらししてくれる人や関係に対して深甚なる敬意と愛情を感じることもできる釣合いのうまくとれた人間にくらべれば、人生においてその半分ほどの成功もおさめないものである。

4 現実感覚があるのなら、可能感覚というものもあるにちがいない

開いたドアをうまく通り抜けようと思うのなら、ドアには、堅い枠があるという事実^{じつじ}に注意を払わねばならぬ——老教授が常に遵奉じゅんぽうしているこの生活信条は、そのまま現実感覚の要求なのだ。しかし現実感覚というものがあるのなら——そしてその存在の正当性を誰も疑わないであろうが——可能感覚と名づけてしかるべき別の何かがあつてもよいはずだ。

可能感覚の所有者は、たとえば、ここぞしかじかのことが起つた、将来起る、起るにちがいないなどとは言わずに、接統法第二式を用いて、ここであるいはしかじかのことが起り得るかもしれないなどという言い方をする。そして誰かが彼に向つて、ある事柄をこれこれしかじかであると説明すると、いや待て、別の場合もあるのではなからうか、と考えるのである。だから可能感覚とは、あり得べき一切のことを考える能力、あるいはあるものを無いものよりも重大視せぬ能力と規定してもよいだろう。かかる創造的素質がすることは注目すべきものと思われるが、遺憾ながら、このために人が嘆賞するも